
S | H -エスエイチ-

東 孝太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S—H - エスエイチ -

【Nコード】

N 2 1 3 4 B A

【作者名】

東 孝太

【あらすじ】

とある国の街外れに、寂れた大監獄があつた。

その名はガレット・デ・ロア。近辺地域で唯一の牢獄であるがために、毎年100万人以上の囚人が収監される。

そんなガレット牢獄では、毎年、ある行事が行われていた。

「選抜」と呼ばれるその行事の内容は、懲役1年以上の囚人による殺し合い。

そしてその選抜を制した選抜メンバーは、毎年変わるあるノルマと共に仮釈放される。

そのノルマをクリアすれば釈放されるが、ノルマを達成出来なければ、即死刑が待っている
そんなリスクを負う自由を、ある二人が選抜を生き残り、獲得した。

二人の自由をかけたノルマ達成の闘いが、始まる。

P r o l o g u e (前書き)

どうもこんにちは。

今回は連載作第3作目です。

まだまだど素人なので、日本語的におかしい所があると思いますが、
どうぞよろしくお願いします。

Prologue

始まりはとある国の街外れにある牢獄だった。

朽ち果てたその外見は、子供が幽霊の牢獄と呼ぶほど不気味で、子供は愚か、大人すら近づかない。

そんな牢獄の最上階。

外見に似合わず、チリ一つ無い部屋に、煙草を吹かす一人の男性。胸に大きなバッチを付けた中年男性だ。

「今年もこの時が来た・・・」

男性はタンの絡んだ声を出した。

男性の目の前には、煙草を吹かす男性よりも小さなバッチを付けた数人の男女。それぞれ煙草の男性の言葉に、相槌を打っている。

「明日の正午、懲役1年以上の囚人を集める。拒んだ奴は殺している。集まり次第、始めるぞ・・・」

男性は白い煙りを吐いた。

「・・・選抜会だ」

Mission 1 「選抜会—出会い」(前書き)

まず第一話です。まだまだ低レベルな小説ですが、温かい目で見守ってください。

よろしく願います。感想もお待ちしております。

Mission 1 「選抜会―出会い」

翌日。小汚い大きな一室に、沢山の囚人達が集められた。

彼等の前には、大きなバッチを付けた男性。男性は悠然と煙草を吹かし、椅子に座っている。

近寄ってきた部下の耳打ちに、バッチの男性は舌打ちをし、「これで全員か……。かなり来てねえな」と呟いた。

男の苛立ちの籠った声に部下が申し訳なさそうに頭を下げた。

バッチの男性は煙草を手で揉み消し、立ち上がった。

「よく集まったなゴミ共。今回集まってもらった理由はもう分かっているだろうが、『選抜会』だ。それぞれゴミ共で殺しあって生き残った二人だけ出してやる。方法は自由だ。ひ弱なヤツも気にするな入るときに拳銃が与えられただろう？それを使えばいいさ。……じゃあ用意はいいな？」

バッチの男性は再び煙草に火を付けた。

「んじゃ、始める」

バッチの男性が、手で音を発てた。男性の声と、その音を合図に、ざわついていた囚人達が、まず、自分の隣の囚人に襲い掛かった。殴り合う者。渡された拳銃で撃ち合う者。その他には、首を絞めあったり、怯えて震えている者もいる。

その中で、すでに、血に塗れた一人の男がいた。

軍人のように筋肉質な体に、汚く生やした髭。だが顔にはまだ幼さが伺える、見た目20歳前後の男である。

囚人達を次々と拳だけで、沈め男に、バッチの男性の視線が釘づけになった。

「アイツは誰だ……。？アイツは多分残る」

「はい。囚人番号765000番。本名はガレットハウス。二十三歳。三年前、舞台の悲劇と言われた30人虐殺事件の犯人です」

「ガレット……。ゴミの癖に、このこと同じ名前か……。」

バッチの男性は舌打ちした。しかし、その目は、面白そうに笑っている。

「さあ、来いよザコ共」

ガレットは血の滴る拳を握ったり開いたりしながら、囚人達に次々と声をかける。そして声をかけた相手を確実に沈めていく。

始まって20分程で、集められた囚人の半分以上が脱落した。

しかも脱落した半分の中の半分は、ガレットによって、脱落させられている。

「オイオイ雑魚ばかりかア？俺はまだ一回も傷つけられてねーぞオ！」

ガレットは、怖じけづき、腰を引く囚人を鼻で笑い、挑発するように言った。

挑発に乗り、ガレットに拳銃を向ける囚人。ガレットは向けられた銃口を見つめて、動かない。

発砲音が響いた。

しかし、倒れたのはガレットの挑発に乗った囚人のほう。その頭には、小さな穴が空いている。

「残念。拳銃持ってたのはてめえだけじゃないんだよ。油断したな」
ガレットは、死体の手からこぼれた拳銃を拾い上げポケットに収めた。

ガレットは、辺りを見渡した。口元は小さく動いており、何かをぶつぶつと呟いている。

「まだまだ多いな・・・多いくせにかかつては来ない。めんどくせ」
ガレットは小さく舌打ちをし、溜息をついた。

銃を両手に構えたガレット。囚人達は様子を伺い、後ろに下がった。

「逃がさねえ。5分だ、5分でこっから半分まで減らす」
無表情で言うガレット。

その姿に恐怖を感じて戦く囚人達の額に、ガレットの手に握られている銃の銃弾が抜けていく。そして皆、言葉を発する間もなく死んでいった。

ガレットの所持していた四十丁の拳銃の弾が全て尽きた時には、辺りは真っ赤に染まっていた。

そして、ガレットの宣言通り、半数が減っていた。

「ざっと見て・・・あと五十人ぐらいか？大分減ったな。まあ、ほとんどガレットの働きだが・・・」

バッチの男はタバコの煙りをはいた。

彼の前では、ガレットが死体から拾った拳銃を使い、残りの囚人を血に染めている。

「このままじゃあアイツ一人になっちまうな。ん・・・・・・・・それじゃあ面白くないな・・・」

「そいつは心配ないぜ。署長さんよ！」

独り言の様に呟いていたバッチの男の言葉に、ガレットが大声で言った。

「一人だけ残してやるからよ！全員は殺さねえから！」

言葉を終えて、再び囚人殺しに専念するガレット。

抵抗を見せる囚人も、逃げる囚人と同じ様に殺害し、とうとう、ガレットを除いて、その場に立っている囚人が、スタイルの良い女性だけになった。

「ああ・・・終わった」

ガレットは大きく伸びた。

そして、殺されずに残った女性に近寄り、肩を抱いた。

「運がいいアンタ。死なずにすんだじゃねえか」

女性の耳元で囁きながら微笑むガレット。女性は恐怖に引き攣った顔で、言葉に頷く。

「オイ！署長！終わったのはわかるだろ！早く出せ！」

ガレットが叫んだ。

その時だった。

渴いた銃声が響き、ガレットの顔に血が飛び散った。

倒れる女性。囚人服は真っ赤に変わっていき、体はビクビク痙攣している。

振り返ったガレットが見たのは、死体の山の上で、まだ煙りの上がる銃を手に持った黄色の肌をした青年の姿。

「なんでおまえは生きてるんですかア？」

ガレットは眉をひくひくさせながら青年を睨んだ。あらかさまに怒りの表情を見せながら威嚇するガレットに対し、青年は涼しそうに、

「隠れてました」

「隠れてたア？」

ガレットの質問に青年は頷く。

「始まった瞬間に、回りに居たのを殺して、その死体の下に隠れてました。案外誰も気づきませんでしたよ」

青年はクスッ、と笑った。

「ようやく、二人だけになったようだな」

バッチの男性がタバコを消して言った。

「殺人鬼ガレット、そして詐欺師サクラギ。貴様らが運命に選ばれた選抜メンバーだ」

「余計な前置きはいい。早く出せ。俺は早くシャバの空気が吸いてえんだよ」

「まあ、そう慌てるな。ただで出す訳じゃねえからな。ちゃんと俺の出すノルマをこなせ。そしたら出してやる」

「ノルマア？んだそりゃ？」

「今回のノルマは・・・『世界を救う』だ」

バッチの男性の言葉に、ガレットは思わず、「ハア？」と叫んだ。

「今、世界にはCUTEキョウトと名乗るテロリスト集団が居る。そのテロリスト集団を倒す。それがノルマだ」

バッチの男性は、言葉の言い終わりに、それと、と付けて続かせる。「一般人は殺すな。一人でも一般人を殺したりしたら、貴様ら二人共死刑だ」

男性は、以上、と言って言葉を終わらせた。

「じゃあテロリスト集団に、殺された場合は？」

サクラギが口を挟んだ。

「それはノーカンだ。貴様らが殺さなきゃいい」

サクラギは、そうですか、とにこやかにいった。

「なら大丈夫ですね」

「大丈夫？」

「あ、独り言です。気にしないでください」

言葉を終えた後、サクラギは微笑を浮かべた。

その時の笑顔に、ガレットは思わず身震いした。

なんの変哲もない笑顔。だが、ガレットにはその裏の真つ黒な顔がはつきりと見えていた。

「俺から伝えたい事は以上だ。着替えるなりなんなりしたら出ていけばいい」

バッチの男性は部屋の横にあつた扉を指差し、真つ赤に染まつた死体だらけの部屋から出て行つた。

「着替えてる間に、自己紹介でもしましょうか」

サクラギは独り言の様に呟き、着替えが置かれているであろう部屋の扉をくぐっていった。

「自己紹介だあ？めんどくせえ・・・つかアイツと居るのがめんどくせえな」

ガレットの視線が床に落ちていた拳銃にいった。

拳銃を見て、ガレットはニヤリと笑う。

「一般人”は”殺しちゃだめなんだよな」

ガレットは拳銃をポケットに忍ばせ、サクラギの入って行つた扉をくぐり、

そして拳銃を構えた。

「・・・・・・どういうことだ」

拳銃を構えたガレットの前には、同じ様に拳銃を構えたサクラギ。既に引き金には指がかけられている。

「それはこつちのセリフでもありますよガレット。その物騒な物を下ろしなさいよ」

「嫌だ。お前から下ろせ」

ガレットは引き金にかけている指にゆつくり力を入れながら言った。明らかな態度を取るガレットの言葉。だが意外な事に、サクラギはあっさりと銃を下ろした。

（バカが・・・）

ガレットは小さく呟き、引き金を引いた。響く、濁った銃声。

しかし、それだけであつた。

サクラギの悲鳴はガレットの耳には聞こえない。銃を震わせるガレットの顔に驚愕の色が浮かぶ。

「なんでだ・・・。なんで弾が出ない・・・」

銃を確認するガレット。その姿にサクラギの顔が、ふっと明るくなった。

「ちゃんと僕の罠にひっかかってくれたんですね。嬉しいなあ」

「罠・・・？」

「あなたが僕を殺すために拾うと予想して、事前に血で使えなくした拳銃を置いておきました。素晴らしい自己紹介でしたよ？殺人鬼ガレット」ハウス。実にあなたらしくたです。じゃあ次は僕です。僕の名前は櫻木健。^{サクラギケン}ここに来る前は、詐欺師をやつてました。趣味は騙しです。どうぞよろしく」

櫻木は勝手に自己紹介を初めて、勝手に終わらせた。

ガレットは殴つてやろうと思ひ、手に力を入れるが櫻木の手が、銃の入っているポケットに手が入っている事に気がつき、思い止まる。「早速ですが、行きましようかガレットさん。僕も早く自由になつて、やりたいことがあるので、ね？ガレットさんも早く出たいでしょう？早く着替えてくださいよ。あなたは血に塗れてきつたない体になつてますので。顔はいいのに、体が汚い。これほど残念な事はありません。さあ早く早く！」

「てめえ！勝手に話をすすめんじゃねえよ！ふざけやがって！」
流石に怒つたガレット。櫻木は申し訳なさそうに頭を下げた。

ガレットはぶつぶつ小言を呟きながら、近くにあつたスーツを着た。「つーか何でスーツしかねえの？もつと動きやすいの無かったのか？」

ガレットは文句をひとついい、体を伸ばした。間接がパキパキと鳴る。体がなまっている証拠だ。

「すぐになれますよ。それじゃあ行きましようか？お互い死なないようにしましようね」

友好的に笑いかける櫻木。ガレットもからかい半分で、「そうだな。死んだら自由どころじゃねえからな」

歩き出した二人。

バラバラは二人であるが、ここだけは、同じ考えをしていた。

”いざとなったらこいつを盾にしよう”と

M i s s i o n 1 「選抜会」出会い（後書き）

次回

「出所」テロリスト」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134ba/>

S | H -エスエイチ-

2012年1月14日22時54分発行